

対談「見える／見えないを超えてー感性と共在の場としての劇場を語る」
美学者 伊藤亜紗×長塚圭史

Art Center NEWが横浜で始めた、
文化芸術の土壌づくり 小川希

劇場はつづく 歴代芸術監督が語る、15年の歩みとメッセージ
宮本亜門、白井晃、長塚圭史

〈REVIEW〉ハリー、高野寛、ドミニク・チェン、乗越たかお

〈神奈川へ、会いに〉NHK横浜放送局局長 高柳由美子

ただいま、KAAT準備中／KAATな人の行きつけ／公演スケジュール

KAAT PAPER
神奈川芸術劇場
Beyond Theatre
「多様性」



伊藤亜紗 × 長塚圭史

見える／見えないを超えて
——感性と共在の場としての劇場を語る

目が見える人も、目が見えない人も、その場にいる全員がともに同じ舞台を“見る”ことができた時、世界の輪郭は変わるのではないか。美学と舞台芸術という異なる領域から、多様性とインクルージョン、身体性、人間がもつ文化芸術への根源的な欲望について語り合います。二人の対話から生まれた言葉は、「こうあるべき」という“正しさ”に縛られがちな社会へ、考えるための新しい視点を投げかけます。

文＝三浦真紀 写真＝リン・イーリン

見える人と見えない人がともに楽しむ
「ソーシャルビュー」とは？

長塚 僕は美学については詳しくないのですが、伊藤さんの書籍を読ませていただいたら、目指すものが僕らがつかもうとしていることそのものの気がしました。僕らは言い尽くせないことを届けようと演劇をやっている。見えないものを一緒につかんで持ち帰ってもらったり、劇場の空間に漂わせているものを浴びたりしてもらう。これはこうと提示するのではなく。

伊藤 わかります。私が学んだ美学は、まさに「je ne sais quoi(言葉では言い難いもの)」を探究する学問でした。かつてはデカルト(17世紀フランスの哲学者・数学者)が人間にとって知性が上位だと提唱していた、それがライブ



ニッツ(17世紀ドイツの哲学者・数学者)の功績で感性の地位が上がり、美学が生まれたんです。知性と感性は何が違うのか。なぜ？と問われたら、知性の働きで理由を言える。でも感性では、いいよね！と思う気持ちははっきりしていても、なぜ？と問われると、一瞬言葉に窮します。すぐに根拠を言えないけれども判断ははっきりしている、それが感性の働きです。私が面白いと思うのは、そのよくわからないけれどやっていることが自分のなかにあること。そこから生まれてくるものが芸術や演劇などの表現につながるんです。



長塚 面白いですね。もとは生物学を学んでいらっしゃったとか。

伊藤 はい。昆虫が好きで生物学者になりたかったんです。そこで生物を学ぶために90年代末に大学に入学。当時は情報ブームで、生物の研究はDNAの塩基配列を読むことが主流でした。でもDNAを分析するって、生き物を乳鉢に入れてすり潰してDNAを抽出、解読すること。だからすり潰した瞬間にこれは生き物じゃないなと私は興味を失ってしまった。生き物は大学に収まるようなものではないのに、その大きさを教えてくれる授業は非常に少ない。そこ

で文系に転科、美学なら生命みたいに要素に還元できないものをふわっとしたまま扱えるので、自分に向いていると選びました。

長塚 伊藤さんが取り組まれていることの一つに「障害のある方たちとどのようにともにいるか」があります。目が見えない人と目が見える人がともに絵画を鑑賞する「ソーシャルビュー」について教えてください。

伊藤 目が見えない人と一緒に美術鑑賞をするというと、目が見える人が見えない人に作品を解説するイメージをもたれると思います。でも実際にやってみると簡単に言葉が出てこないし、みんなが違うことを言う。大きさも「このくらい」では通じないし、色は先天的に全盲の人は色彩感覚がないので、「いちごっぽい感じ」などと言い換える。目が見える人は自分の当たり前が通用しないなかで見えない人と一緒に共通言語をつくる、そのプロセスが面白いんです。それはその場に参加した人たちだけの共通言語で、見える人も見えない人も他者を通して作品を見る感覚が生まれる。普通、「見る」の主語は一人称ですが、複数で見ていく面白さを「ソーシャルビュー」として伝えたかった。

そうすることで、目が見えない人も主語に入れるからです。見えない人は、見える＝正解を知るというプレッシャーを感じて生きていて、自分は見えないから正解を知らない、見える人がいつも正解を教えてくれると思い込んでいるわけです。でも美術鑑賞をすると、見えている人の言うことがすべて違うし、そもそも言葉が出てこない。見えること自体がそんなに絶対的なものではないことに気づく。それは見えない人にとって大事なポイントで、自分も主語のなかに入れる、見ること自体の新しい経験になっていくんです。

長塚 いいですね。僕は全盲の役をやる俳優と連れ立って3人でダイアログ・イン・ザ・ダーク^{*1}に行ったことがあります。日時を予約したら事前に電話があり、その時は僕らだけだから意味がないと。それで時間をずらしたら子ども二人を連れた女性が参加して、全盲の案内の方を含め7人で回ったんです。すると僕が暗闇のなかにはいるのではなく、7人がいて同じものを見ている状態になった。まさに自分と他者がひとつ

つながりになった感覚で、終わったあとの別れが印象深かった。

伊藤 社会とは？と考える時、一般的には視覚がベースで、まず人と目を合わせて話しましょうと。それは視覚前提で社会の仕組みやエチケットがつくられているから。そこで視覚を引き算したらすべてが変わる。

長塚 人それぞれ価値観は全然違うのに、社会のルールがどんどん増えていくことへの怖さもあります。目の見えない人や多様な人たちが大勢いることを意識できたら、もっと広げて考えられるんじゃないかな。

伊藤 インクルージョン(包括)やダイバーシティ(多様性)と言う時に、日本ではマジョリティーにマイノリティーをインクルージョンするかたちになりがちで、結局多様性を消しているところがあります。インクルージョンとダイバーシティは緊張関係にあるのに、そこが対立的に受けとられていない。ダイバーシティのためにインクルージョンしてしまう、みたいな。歯痒いですね。



すべての人がもつ「正しきさ」を楽しむ自由

長塚 KAATでも今、さまざまな取り組みをしています。2025年2月に上演した『花と龍』では「やさしい鑑賞回」を設けました。この回は発達障害がある方など普段、劇場での観劇が難しい方、不安な方もOKな回。客席は明るめで会場の出入りは常に自由。劇が始まる前にこの回の意図も説明しました。でもこの演目は、明治後期の北九州の荷役労働者たちの物語。果たして楽しんでいただけるのだろうかという声もありました。でも、最後は子どもも含め、お客さんが総立ちで拍手！そこで気づいたんです。障害のある方だって、いわゆる優しくてきれいな話だけでなく、任侠ものやホラーものを見る楽しさもあるよなって。こういうのが広がればいいのだけど。

伊藤 多様性を考える時、私が大事なと思うのはマジョリティーがバラバラになること。そうすればそこにマイノリティーは自然と入れるようになるんです。マジョリティーがお行儀よく座って、ここではこうするのが正解という雰囲気を出すと、それに従わない人は排除される。劇場でこれをやるのは疑問という、正しきさの可能性があってもいいんですよ。

長塚 僕は劇団を主宰しているから思うけど、劇団なら何でもできるんです。鑑賞サポートもあるし、80人しか入れない地下の劇場に盲導犬を入れたりもする。ここまでやらなければいけない、ではなく、僕らができることをやればいい。

伊藤 障害をもつ人がよく言うのは、障害者になった瞬間に安全が





優先順位の上に来て、失敗や怪我、冒険ができないこと。前もって危ないからやめておくという判断になって、挑戦や冒険をする機会が失われてしまう。

長塚 近藤良平※²さんが以前から障害者の方々と活動しているダンスチーム「ハンドルズ」は、面白いし出演者がみんな楽しそう！覚えているのは、車椅子の男の子が短いスカートをはいた素敵な女性のあとをついていくシーンがあったんです。今は避けるべきものだけど、当時見た時は本質がめちゃくちゃ詰まった強い表現で僕は涙が出そうになった。良平さんは誰しもみんな同じだと言ってるなあって。

伊藤 いい話ですね。韓国にあるMODU ART THEATERはフィジカルなアクセシビリティに取り組んだうえで、「欲望に対するアクセシビリティ」を目指しています。障害がある方は空気を読んで、その場における正しい欲望しか言わない。心底やりたいことがあっても、言ったらみんなが困る、障害者らしくないと言われるんじゃないかと欲望に蓋をしているんです。せめて劇場ではそれを出そう！と。障害者が解放されるために、このアプローチは必須だと考えています。

長塚 よくわかります。僕らが社会生活のなかで規範を守り、破らないために、映画や演劇、音楽を楽しみ、解放される。時

には凶暴なものを見て、荒ぶる心を鎮めることもあるかもしれない。社会とどうにか折り合いをつけ暴走しないためにも芸術はあると思う。劇場がその役目を果たせたら。

伊藤 今、韓国では障害の問題がブームみたいなところがあって、美術でも障害をテーマにした展示が非常に多いんですね。こういう展示は日本だと「Art by people with disability(障害者によるアート)」になりがちですが、韓国では「Art on disability(障害についてのアート)」、障害に対するいろんな見方を増やしていこうという方向性。日本でももっとコンセプチュアルな部分を考えていかなければと思います。

長塚 日本は根深い。これではいつまで経っても分けられた状態が続いてしまう。

伊藤 俳優であり弁護士、ご自身も障害をもち、MODU ART THEATERにも深く関わるキム・ウォニョン※³さんは、韓国の障害界のリーダー的存在です。彼が障害者の権利運動のデモで大地を這って進んでいた時、自分の前にいた重度の身体障害の友人のふくらはぎにすごく筋肉がついていることに感動し、これだ！と思ったそうです。つまり法律があるから障害者が受け入れられるのではなく、自身がもつ魅力に惹かれて一緒に働きたい、となりたいと。法律や権利は大事ですが、同時に美的な側面、例えば下半身が麻痺している身体のかっこよさに惹かれて人が寄ってくる状況が、人間としての自然なカタチ。それができるのがダンスや演劇だと彼は言っています。

長塚 そのとおりですね。伊藤さんが考える多様性とは？

伊藤 障害をもつ人で、「多様性が」という人にあまり出会ったことがないんです。当事者からすると距離がある言葉なのかと。そのギャップを想像すると、多様性と言われると障害者のラベルを強く貼られるということだと思うんです。著書『目の見えない人は世界をどう見ているのか』を出版した時、視覚障害の方からの感想で一番多かったのは「勉強になりました」。視覚障害といっても一人ひとり全然違うので、ほかの人はこうなんだ！と読まれたんでしょうね。多分、共通項はないのに、外から視覚障害者という枠にはめようとする。多様性意識が高まるほど、ラベリングやグルーピングが強くなって当事者が困る場面があるのではないのでしょうか。

長塚 うーん、確かに。

伊藤 誰でも人間にはいろんな側面があるはずで、視覚障害者というのは



側面の一つにしかすぎません。ほかの側面を見ればゲーム好きな若者だったり、恋をしていたり、ギャンブルにはまっているかもしれない。社会が多様性と言うほど、その人のなかの多様性がどんどん見えなくなる。その窮屈さを当事者は感じているのではないかと想像しています。私は社会のなかの多様性ととともに、一人のなかの多様性、いろんな場所でいろんな顔ができる、それが約束された多様性が大事だと思っています。

長塚 言葉にすることで間口や可能性が広がるけれども、もどかしさはありますね。その言葉を使えばやっている気になる、みたいな。

伊藤 枠組みは大事。そのうえでどう自由にやるかは頭の使いどころかと。

長塚 伊藤さんのお話を伺って、僕らに足りないものや忘れていたものを思い出しました。この視点が実現したら世界は変わるだろうし、構造にも踏み込める。僕も伊藤さんの授業を受けてみたいです。



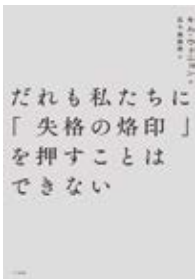
- ※1「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」……………照度ゼロの暗闇空間で、聴覚や触覚など視覚以外の感覚を使って日常生活のさまざまなシーンを体験するエンターテインメント。
- ※2「近藤良平」……………振付家・ダンサー。男性ダンス集団コンドルズ主宰。2022年より彩の国さいたま芸術劇場芸術監督を務めるなど多方面で活躍する振付家。
- ※3「キム・ウォニョン」……………韓国の俳優・弁護士。骨形成不全症当事者として身体と社会を問う表現活動や著述を通じ発信を続ける人物として知られている。

書籍紹介

もっと理解するための2冊



『目の見えない人は世界をどう見ているのか』
伊藤亜紗(光文社新書)



『だれも私たちに「失格の烙印」を押すことはできない』
キム・ウォニョン(小学館)

伊藤亜紗 Asa Ito

東京科学大学 未来社会創成研究院／リベラルアーツ教育研究院 教授。2020年2月～2024年9月まで東京工業大学科学技術創成研究院「未来の人類研究センター」の初代センター長を務める。専門は、美学、現代アート。もともと生物学者を目指していたが、大学3年次に文転。障害を通して、人間の身体のある方を研究している。2010年に東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究美学芸術学専門分野を単位取得のうえ、退学。同年、同大学にて博士号を取得(文学)。学術振興会特別研究員を経て、2013年に東京工業大学リベラルアーツセンター准教授に着任。2016年4月より現職。近著に、『記憶する体』(春秋社、2019年)、『手の倫理』(講談社、2020年)、『体はゆく できるを科学する〈テクノロジー × 身体〉』(文藝春秋、2022年)など。

Art Center NEWが横浜で始めた、 文化芸術の土壌づくり

2025年6月、新高島駅の地下にオープンした〈Art Center NEW（アートセンターニュー）〉は、「NEW＝新しさとは何か？」を問い続ける、街にひらかれた芸術複合施設です。ディレクターを務める小川希さんは、15年以上にわたり吉祥寺で〈Art Center Ongoing（アートセンター・オンゴーイング）〉を運営し、若いアーティストの挑戦を支えてきた人物。横浜という地で、次の世代とともにどんな“新しい文化の芽”を育もうとしているのでしょうか。

アートセンターニューって何？

〈アートセンターニュー〉は、新高島駅の地下1階にある展示スペースのほか、カフェやZINE※・アートグッズのショップを備えた複合的な施設です。小川さんが2008年に吉祥寺で立ち上げた〈アートセンター・オンゴーイング〉も、ギャラリーとライブラリー、カフェを併設したインディペンデントな芸術拠点として知られています。この二つの施設に共通しているのは、美術館や商業ギャラリーとは異なる、もっとひらかれた「アートのスペース」というあり方。アートのスペースって、どんな場所なのでしょう。

「文化芸術に関わるさまざまな人の表現と交流の場所です。吉祥寺の〈アートセンター・オンゴーイング〉は、現在進行形の実験的な表現を追求できる場として、完全にインディペンデントとして運営してきました。新高島の〈アートセンターニュー〉も、パフォーマンスや音楽、映画の上映、子ども向けのワークショップ、NEW SCHOOLという講座を開設するなど、文化芸術との新たな接点が生まれる場を目指しています」

※ZINE……個人または少人数のグループが、自主的に発行する出版物のこと。



アートの自由な実験場 「Art Center Ongoing」をつくった理由

小川さんが「アートのスペース」に関心をもったのは、学生時代に見たヨーロッパの光景がきっかけでした。「学生時代、7歳上の兄が画家としてベルギーのアントワープに滞在していたので、長期休みに遊びに行ったら、そこを拠点にバックパッカーついで周辺の国々を回りました。多くの街にはカフェやシアターが併設されているアートのスペースがあって、展示している若いアーティストと、ふらっと立ち寄った地元のお年寄りが談笑している光景をよく見かけました。週末には、子どものワークショップや映画の上映会があり、アートを中心に人が集まっていた。日本にはなぜこんなに豊かな場所がないのだろう、という疑問が原点でした」

小川さんは、東京大学大学院在学中に、若手アーティストを対象とした公募展覧会「Ongoing」を企画・開催。2008年には〈アートセンター・オンゴーイング〉を設立し、現在も2週間に1回のペースで企画展を続けています。「以前は、若いアーティストが自由に実験できる場所が、本当に少なかったんです。僕自身もアーティストとして作品制作をしていたので、知名度に関係なく挑戦できる場の必要性を強く感じていました。誰かがやらなくちゃいけない、それなら自分でやろうと思ったのが始まりです」



ヨーロッパとアジアを回り 「横浜」に見出した、未来のアートの可能性

インディペンデントなアートのスペースには、完全な自由があります。しかしその財源は、カフェの収益と、小川さんの個人の仕事、大学講師やアートイベントのディレクションの収入で補っていました。

「吉祥寺では、ほぼ一人で運営してきましたが、このやり方には限界があると感じていました。もし自分が倒れたらすべてが止まってしまう。持続可能な仕組みをどうつくるかが課題でした」

そんな問題意識を抱えながら、小川さんは海外のアートのスペースを調査する機会を得られます。2016年に国際交流基金のフェローシップで、東南アジア9ヶ国83ヶ所のアートのスペースをリサーチ、2021年には文化庁新進芸術家海外研修制度でウィーンに1年間滞在。約80ヶ所のアートのスペース（現地では「オフスペース」と呼ばれる）を調査しました。

「東南アジアでは助成金を得ることが難しく、アーティストがコレクティブをつくり、自分たちでスペースを運営していました。その独立の精神には感銘を受けた一方で、その後、訪れたヨーロッパでは、国や自治体から潤沢な助成金があるケースが多かった。話を聞くと、これは前の世代が行政に働きかけ、助成金や民間企業からのサポート環境を整えてきた結果であり、次の世代のために闘って勝ち取ったものだと言うのです。それは、自分にはなかった視点でした。世代を超えて文化を継承する仕組みの重要性を強く感じました」

小川さんはウィーンから帰国後、次の世代のアーティストによりよい文化芸術の環境を手渡すために、新しいアクションを起こさねばと考えていました。そんな時、横浜市が「新高島駅地下1階展示場及び隣接道路区域」の運営事業者の公募を始めたという知らせを聞きます。

「横浜なら、行政や企業とのコラボレーションや、これまでできなかった新しいシステムの構築にも挑戦できるのではないかと、公募に参加することにしました」

誰もが芸術や文化に触れられる クリエイティブな土壌を育てる

横浜では、2004年の創造都市（クリエイティブシティ）施策によって、芸術や文化のもつ創造性を活かしたまちづくりが本格的に始動。以来、BankART1929や黄金町エリアマネジメントセンターなどのNPOが行政と協働し、横浜のアートシーンを牽引しています。「横浜のアートシーンはとてもよい状態に成熟していると思います。僕がここでやるべきことは、そこに新しい風を入れること。海外のアーティストや、異なる分野とも積極的につながっていくという意識をもっています」

また、2026年からは地域との関わり方をさらに育むため、1月にはブックフェア「Book and Food FAIR」が開催されます。「アートブックと食をテーマにしたイベントです。これは、スタッフからの発案で始まりました。僕は〈アートセンターニュー〉では、キュレーションには関わらず、若い世代のキュレーターに裁量や責任を渡し、彼らもまた挑戦する場にしたいと考えています。具体的なコンテンツは若い世代がつくり、僕は総括的なディレクターとしてその実現の後押しをする。そうしたシステムをここでは構築したいんです」

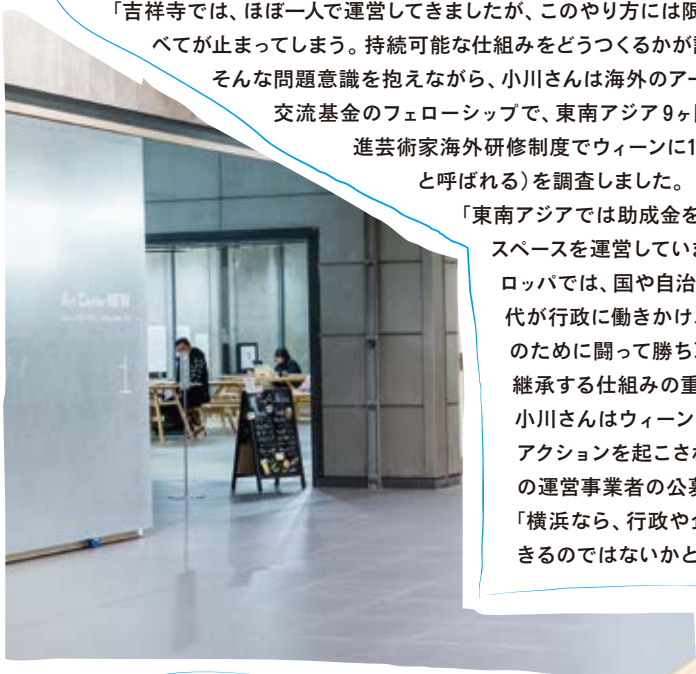
さらに、横浜美術館の学芸員がNEW SCHOOLの講師を務めたり、YPAMへの会場提供、黄金町エリアマネジメントセンターとのネットワーキングなど、「横のつながり」づくりも進んでいます。

「地域のコミュニティを目指して、お子さんも過ごしやすいように小上がりを設けました。新高島駅周辺は企業や大学が主で、どうやって日常的なコミュニティを育てるかが課題です。今は草の根的な活動も継続しながら、いずれはこの場所から自然発生的に文化が生まれていく、そのための土壌をつくっていきたいと思っています」



小川希 Nozomu Ogawa

〈アートセンター・オンゴーイング〉代表、〈アートセンターニュー〉ディレクター。1976年、東京都生まれ。2001年武蔵野美術大学映像学科卒業、2003年東京大学大学院学際情報学府修士課程修了、2006年同大学院博士課程単位取得退学。2008年1月、東京・吉祥寺に芸術複合施設〈アートセンター・オンゴーイング〉を設立。中央線沿線周辺を舞台に展開する地域密着型アートプロジェクト「TERATOTERA」ディレクター（2009～2020年）、茨城県県北芸術村推進事業交流型アートプロジェクトキュレーター（2019～2020年）など多くのプロジェクトを手がける。2024年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。



Art Center NEW

〒220-0012
神奈川県横浜西区
みなとみらい5-1 新高島駅 B1F
tel▶ 045-414-5300
営業時間▶ 12:00-20:00
定休日▶ 展覧会、イベントごとに異なります。
来場前にHPをご確認ください。
URL▶ <https://artcenter-new.jp>

劇場はつづく



歴代芸術監督が語る、15年の歩みとメッセージ

15周年を迎えたKAAT神奈川芸術劇場。この節目に、劇場の歩みを形づくってきた歴代芸術監督3人に、就任時にみていた景色や大切にしてきた思い、そして今だからこそ伝えたいメッセージを伺いました。3つの視点から、KAATが歩んできた15年と、これからの劇場の姿をたどります。

宮本亜門



宮本亜門 Amon Miyamoto 演出家。ミュージカル、ストリートプレイ、オペラ、能、歌舞伎など多彩なジャンルを手がけ国境と言語を越えた舞台表現を追求し続ける。近年では『画狂人 北斎』、三島由紀夫の『サド侯爵夫人』。海外ではミュージカル『KARATE KID』『COMPANY』を演出。

KAATが教えてくれたこと

私はKAAT(神奈川芸術劇場)がまだ構想段階だった頃から関わり、2011年の開館から4年間、初代芸術監督を務めました。振り返れば、あの時間は「劇場とは何か」を仲間と探し続けた、かけがえのない日々でした。

開館準備の頃、ニューヨークやベルリン、ロンドンで芸術監督たちと語り合い、劇場は“建物”ではなく、地元の人々と共に息づく場だと深く感じました。当時の神奈川には「本物は東京にある」という偏見もありましたが、その誤解を変えたく、横浜が持つ文化の誇りを再び輝かせたくて、三島由紀夫『金閣寺』を柿落としに選び、NYへの発信へと踏み出しました。

開館からわずか2ヶ月後、東日本震災が起こり、劇場は避難所となりました。この経験は、劇場の本来のあり方を深く見つめ直す転機となりました。劇場にきたことのなかった方々とどう出会い、どう寄り添うか。舞台と客席の境界を超え、誰の心にもそっと光を灯す時間をつくりたい——その想いが、KAAT キッズ・プログラムや地域との新しいつながりを生みしました。

パフォーマンスは時代とともに呼吸し、時代をも変えていきます。揺れ続けるこの社会の中で、不易流行の精神を大切にしながら、劇場は迷いや不安を抱く人々に小さな灯をともし場所でありたい。これからも新たなクリエイターがここから羽ばたいていくことを心から願っています。

そして、佐藤卓さんと共に名づけた「KAAT」という名前が今も多くの方に親しまれていると聞くと、胸が温かくなります。KAATが単なる劇場ではなく、誰もが気軽に帰って来られる“親しいハウス”として、集い、感じ、語り合える場へと広がっていくことを願っています。

2010年-2013年



劇場が竣工した際の外観写真

撮影=森日出夫

白井晃



白井晃 Akira Shirai 演出家。俳優。1983～2002年、遊樂機械/全自動シアター主宰。演出家としてストリートプレイから音楽劇、ミュージカル、オペラまで数多くの作品を手掛ける。読売演劇大賞優秀演出家賞、湯浅芳子賞(脚本部門)、小田島雄志・翻訳戯曲賞などの受賞歴がある。14年4月～16年3月、KAAT神奈川芸術劇場のアーティスティック・スーパーバイザー、16年4月～21年3月、同劇場の芸術監督を務める。22年4月より世田谷パブリックシアター芸術監督。

公共劇場のさらなる可能性を

私がアーティスティック・スーパーバイザー、そして芸術監督としてKAATに関わらせていただいたのは、開館からまだ4年目の2014年4月から2021年3月まででした。劇場としての方向性や特色を模索していた時期だったと思います。多くの議論を重ね、多くの企画をトライさせていただきました。あっという間の7年でしたが、さまざまな出来事があり、多くの人と出会わせていただきました。私がその時感銘を受けていたのは、失敗を恐れない劇場の精神でした。面白いとみんなで考えたことは、まずは挑戦してみようという空気が劇場全体に満ち溢れていました。それは今も変わらぬ進取の精神だと思います。これがKAATの持つ素晴らしさです。長塚さんが芸術監督になられてからも驚きの連続です。驚きは感動に変わります。劇場に足を運んでくださる方々が感動を覚え日々の暮らしの肥やしになること。劇場は人が作るものです。観客の皆さんと作るものです。神奈川県劇場として、そして横浜に立地する劇場として唯一無二の劇場たらんことを。「とんがれ、とんがれ!」かつて私が勇気を与えていただいた言葉を、15周年のお祝いの言葉に代えて贈らせていただきます。

時の外壁
KAAT 10th
KAAT WINTER PRODUCTION 2021

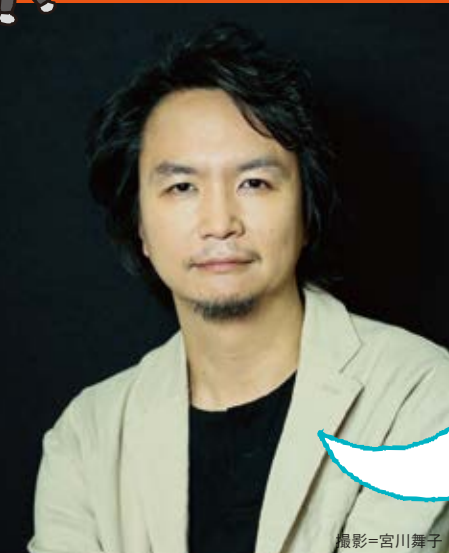


2016年夏の外壁

2016年-2020年



長塚圭史



撮影=宮川舞子

長塚圭史 Keiichi Nagatsuka 劇作家・演出家・俳優。1996年早稲田大学在学中に演劇プロデュースユニット「阿佐ヶ谷スパイダース」を結成。2011年、ソロプロジェクト「葛河思潮社」を始動、2017年には、新ユニット「新ロイヤル大衆舎」を結成。2019年4月よりKAAT神奈川芸術劇場芸術監督に就任、2026年4月再任(任期は2031年まで)。

劇場の未来を担う、「種」を育てる

芸術監督に着任した2021年4月は、新型コロナウイルスの影響がまだ色濃く、「街にひらく劇場」を掲げながらも、予定していた多くのことが困難な状況でのスタートでした。そのなかでも、シーズン制の導入や、KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト、KAAT キッズ・プログラム、バックステージツアー、『KAAT PAPER』の制作など、一つずつ地道に取り組み、この5年間でようやく地ならしを終え、種蒔きができたと感じています。

次の5年は、この種を育てる段階です。国際共同制作も少しずつ成果を上げています。2025年3月に休館した神奈川県民ホールとも連携しながら、県内の皆さまに上質な作品をお届けしていきます。そして、力を入れていきたいのが「カイハツ」です。これは劇場がアーティストに思考や実験の場を提供し、その過程や成果をアーカイブすることで、なかなか目につきにくいですが、国内外から少しずつ注目を集めはじめている劇場の未来につなげるプロジェクトです。また、時代に応じて劇場内部の働き方を改善し、アクティブかつ持続可能な劇場運営を実現していくことも重要な課題です。

KAATは公共の劇場です。年間を通してさまざまな公演が行われていますが、ほかにもアートの展示、アトリウムで休憩したりマルシェを楽しんだり、この空間を自由に活用してください。足を運ぶと日常が少し明るくなったり、ちょっと手を伸ばしてみれば、人生を変えるような出会いがあるかもしれません。KAATは、日常の延長線上にある、「ひらかれた劇場」であり続けられるよう、これからも努めていきたいと思っています。

2021年-2025年



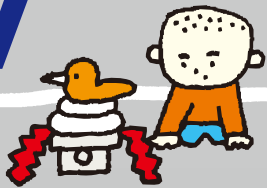
2024年度のテーマ「某(なにがし)」の外壁。イラストレーター竹浪音羽さんの書き下ろし作品をフィーチャーした。



長塚圭史芸術監督就任後から始まった今年度の外壁。「虹」を中心に、これまでのデザインが勢ぞろい



REVIEW



KAATキッズ・プログラム2025

『わたしたちをつなぐたび』

2025年7月21日（月・祝）― 27日（日）
KAAT 神奈川芸術劇場 〈大スタジオ〉

絵本から飛びだすたび

文＝ハリー（移動書店ハリ書房店主）

原作：イリーナ・ブリヌル
訳：三辺律子
上演台本・演出：大池容子
音楽：小林顕作
出演：藤戸野絵、少路勇介、下司尚実、
山田茉琳、岩永丞威

Copyright Used by Permission of Palomino Films
Ltd. f.s.o. Irena Brignull (the Licensor)
c/o Felicity Bryan Associates Ltd. through Japan
Uni Agency, Inc., Tokyo.

夏休み。私も書店として出店していた「KAATマルシェ」の開催時、子どもたちに紛れて観劇した。上演に合わせて同タイトルの絵本も当日マルシェで販売していた。

『わたしたちをつなぐたび』― 主人公の女の子の探し求めているものとは？ もしかしたら誰でも一度は考える、疑問に立ち向かう旅のお話、自分はどこからやってきたのか？ そしてたどり着く過去とあらためて知る母親の深い愛のやさしいお話。

絵本とお芝居で共通するのは、自分自身はその場を動いていないこと、それでも自分の心は今見ている目の前のお話に心を揺さぶられ、一緒になって旅をすることだと思う。

お芝居では、好奇心旺盛で元気のよいとても印象的な主人公の女の子がいる。絵本の神秘的な雰囲気から飛びだし存在感を与える演技には自然と引きつけられ、上演中は大人も、子どもたちも、みんな一緒に旅に出かけていたように感じる。

神秘的な森のイメージは、リスやシカの機敏な身のこなしや、時にはゆっくりと舞うような動きからも生みだされていた。動物たちの個性も表現されていて、それが森のなかにいると感じさせてくれているようだった。

そして明かされる、お母さんと女の子との関係性と深い愛。まだ旅に出ていない皆さんは、ぜひ絵本でも確認してほしい。



撮影＝西野正将

ハリー Harry

ゲーム制作会社や教育分野のNPOでの勤務を経て、2005年、新潟市にハリ書房本店をオープン。2021年より移動書店での活動を開始。「子どもたちに良質なコンテンツを届け、いつまでも自分が一読者であれるように」ちいさな一步一步を移動中。KAATマルシェには、初回より出店。

KAAT EXHIBITION 2025

大小島真木展 | えな あなたの胞衣はどこに埋まっていますか？

2025年9月21日（日）― 10月19日（日）
KAAT 神奈川芸術劇場 〈中スタジオ・アトリウム〉

作家：大小島真木
音楽：カーティス・タム

死生が絡まる時空

文＝ドミニク・チェン（情報学研究者）

真っ暗な産道を過ぎると、そこには祝いと祈りの空間があった。体が自ずとその場を周り始めると、にぎにぎしくも静かな、昏くも明るい、物悲しくも喜ばしいといった、矛盾する印象の群に同時に包まれた。それは大小島真木が死と生を、一つに絡まり合った現象として立ち現れるようにすべてを配置しているからなのだろう。

多種多様な存在がそれぞれの役を演じているこの演劇空間のあちらこちらで、大小の鏡が互いの存在を重重無尽に映しだしている。四隅のベンチに座ると光に照らされた来場者たちが巡礼者のように廻り、いつのまにかこの舞台の一員と化しているのが見える。そう、わたしたちはいつも忘れてしまう。すべてが同時に起こっていることを。管理社会はいつも「生か死か」の二者択一を迫る。そうではなく、生きていて、死んでいて、また生きていて……と、途切れることなくつながっていることを、そして、わたしたちの道がたとえ分かれたとしても、境界を超えて互いをその身に映しだしながら存在していられることを、思いだす。



撮影＝Norihito Iki

わたしたちの胞衣はあらゆる場所に埋まっている。そして、あなたたちとはどんな時にでも出会いなおせる。わたしはこの空間で感得した十重二十重とえはたえの感情を胸に抱き続けたまま、日常を生きていきたいと強く祈った。

ドミニク・チェン Dominique Chen

1981年生まれ。博士(学際情報学、東京大学)。早稲田大学文学学術院教授。大学では発酵メディア研究ゼミを主宰し、「発酵」概念に基づいたテクノロジーデザインの研究を進めている。著書に『未来をつくる言葉―わかりあえなさをつなぐために』（新潮社）、など多数。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote』

2025年9月14日（日）― 10月4日（土）
KAAT 神奈川芸術劇場 〈ホール〉

作・演出：ケラリーノ・サンドロヴィッチ
出演：大倉孝二、
咲妃みゆ、山西惇、音尾琢真、矢崎広、
須賀健太、清水葉月、土屋佑壱、武谷公雄、
浅野千鶴、王下貴司、遠山悠介、安井順平、
菅原永二、犬山イヌコ、緒川たまき、高橋恵子
演奏：鈴木光介、向島ゆり子、伏見瑩／細井徳太郎、
関根真理、関島岳郎

覚めやらぬ悪い夢から

文＝高野寛（ミュージシャン）

近頃、雑談が近過去に及ぶと、「あれ？ 何年前だっけ？ コロナ禍で時間の感覚がバグっているよね」となることがたびたびある。

目には視えない何かに世界中が振り回された、悪い夢のような数年間。せめてものの救いは、その悪夢の記憶を世界中の人々と共有してきたことだろうか。コロナ禍という非日常がフェイド・アウトして、我々はあれよあれよという間に再び日常に振り回されることになったが、戻ってきたはずの日常はなんだか以前の当たり前とは少し違っているようで、じつは悪い夢は通奏低音のように続いているのかもしれない。

『最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote』を観た。4時間弱の舞台、意識はたちまち舞台に吸い込まれて、激しく揺さぶられ、時間の感覚がバグってゆく。舞台と客席、虚構と現実の境界線が曖昧になる。古典的で荒唐無稽なはずの物語が時折、現在・現実と重なる。巧みな脚本と演出、キャストの確かな演技、そして生で演奏される音楽の重層的なダイナミクス。ユーモアと毒をたっぷり浴びながら、心地よい悪夢とともに彷徨った。

クラクラしながら、第三京浜を上って日常にフェイド・インした。目に飛び込む夜景がいつもより輝いて見えた。ああ、この世界でよかった、と思えた。



撮影＝引地信彦

高野寛 Hiroshi Takano

1964年生まれ。1988年、高橋幸宏プロデュースによるアルバム「hullo hulloa」でソロデビュー。ソロのほか、バンドでも活動。ギタリストとしてもYMO、高橋幸宏、細野晴臣、坂本龍一、TEI TOWA、星野源をはじめとした数多くのアーティストのライブや録音に参加。

KAAT DANCE SERIES

『CARÇA -カルカサ-』

2025年10月24日（金）― 25日（土）
KAAT 神奈川芸術劇場 〈ホール〉

振付・演出：マルコ・ダ・シルヴァ・フェレイラ
音楽：ジョアン・バイシュ・フィリップ、
ルイシュ・ビシュタナ
出演：マルク・オリヴェラシュ・カーサシュ、
マルコ・ダ・シルヴァ・フェレイラ、
ナラ・レヴロン、アンドレ・スピーディ、
ファビオ・クレイズ、マリア・アントーヌシュ、
マックス・マカウスキ、メラニー・フェレイラ、
ネルソン・テウニシュ、
エリック・アモリム・ドス・サントス

多様な身体が魂でつながる

文＝乗越たかお（作家／舞踊評論家）



撮影＝José Caldeira

今、世界のダンス界で南ヨーロッパは大いに活躍しているのだが、なかでも注目されているのがポルトガルのマルコ・ダ・シルヴァ・フェレイラ。これはその代表作である。ライブのパーカッションと電子音楽が響くなか、客席のドアから国籍も身体的背景も多様な10人のダンサーが入場してくる。義手のダンサーも含む彼らの独特な動きは観客を一気に引き込む。やがて群舞ではシャツの裾をたくし上げ伸ばした腕を張って帆のように掲げるなど、力強いエネルギーで舞台を満たした。

作品中は「独裁者がやってくる」等のテキストや、感光布にライトで「すべてのかべはくずれる」と書くなど、わりと直截的なメッセージが提示される。しかし世界中で終わりの見えない紛争が続く今の観客には、いささか純粹すぎると映るかもしれない。だが本作はポルトガルで長期間続いていた独裁政権下（1933～1974年）で伝統や文化が支配の道具に使われ、民主化後には人々の気持ちがいからから離れてしまったことが大きいという。タイトルの「カルカサ」は「骸骨/残骸」という意味だが、それは独裁によって失われかけた文化とアイデンティティーの状態を示しているようだ。

しかしこの作品は単なる回顧ではない。ラストにオレンジ色の照明のなかで一丸となって力強く踊るダンサーたちの姿は、未来に進んでいくエネルギーに満ちている。過去を見つめ、しかし縛られることなく、今ある多様性のまま手を取り合い次の時代に踏みだしていく決意にあふれていたのである。

乗越たかお Takao Norikoshi

作家・ヤサぐれ舞踊評論家。株式会社ジャパン・ダンス・ブラグ代表。26年ポーランド国立ダンスセンターからアジア圏より唯一の国際審査員に選出、現在は国内外の劇場・財団・フェスティバルのアドバイザー、審査員、講座など活躍の場は広い。ダンスマガジン誌等で執筆。

神奈川へ、会いに〈NHK横浜放送局局長 高柳由美子さん〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらりと会いに出かけます。第13回は、KAATのおとなり、NHK横浜放送局の高柳由美子局長とアトリウムで集合しました。高柳さんがこれから横浜で取り組もうと考えていることや、KAATとの連携について伺いました。

写真＝石渡朋

長塚 高柳さんが局長に就任された時にご挨拶して以来ですが、あれからいかがですか。

高柳 私自身、6年ぶりの横浜放送局なので、この機会に深く神奈川県を知ってみようと思ひまして、神奈川県内33市町村を訪れて、首長さんにご挨拶してきました。どの自治体も個性豊かで、興味深いですね。

長塚 僕も「KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト」でそれを感じました。久しぶりの横浜はいかがですか。

高柳 じつは私、横浜在住なんです。父が転勤族だったので、静岡や名古屋など各地を転々としたんですが、横浜が一番長くなりました。以前は渋谷まで通っていたので、今回の赴任で通勤が格段に楽になりました。

長塚 高柳さんは、NHKの女性初のテクニカルディレクター(TD)や、放送局では初の女性の技術部長を務められ、ずっと技術畑だったそうですね。

高柳 いわゆる「リケジョ(理系女子)」なんです。当時、NHKの技術職採用は、電気系学科の卒業生が比較的多かったんです。私は電気工学科の専攻で、テレビが好きという理由で入社したのですが、男女雇用機会均等法の施行から数年後の頃で、まだ女性は少数でしたね。

長塚 NHKは転勤が多いと聞きますが、最初はどちらへ？

高柳 仙台放送局が最初の異動先でした。地方局では少ない人数で多くの業務を担当するので、制作の仕事を幅広く学ぶことができました。それから5年後に放送技術局(現・メディア技術局)に異動になったのですが、東京は規模が大きく専門性が重視されるんですね。そこで、TDを担当することになりました。TDは技術チームの取りまとめのような仕事です。当時は、年配の男性が務めることが多かったのですが、若いTDも増えている時期で、上司が若い女性がやってみるのも面白いだろうと配置したそうです。

長塚 実際に担当してみて、いかがでしたか。

高柳 皆さんに助けをもらいながら、どうにかこうにか。初めてのことがばかりなので最初は戸惑うけれど、慣れたら案外いい人だった。今は少なくなりましたが。それから、ずっとTDを続けられたんですか。

長塚 わかります。当時は気難しい方が多かったですね。怒られた理由がわからずに最初は戸惑うけれど、慣れたら案外いい人だったりする。今は少なくなりましたが。それから、ずっとTDを続けられたんですか。

高柳 そうですね。だいぶ長く続けましたから、これは私の天職だと思っています。

長塚 素晴らしいです。それからいくつかの業務を経験されて、2025年に局長として横浜に戻られました。ここで取り組みたいことは？

高柳 一つは組織内部のことです。専門性のある職員たちが最大限に力を発揮できるように、部署間の横の連携を深めながら、風通しのいい組織をつくりたいと思っています。トップダウンよりも、現場から自発的にアイデアが生まれて、それを上層部が後押しする体制のほうが、やりがいのある職場づくりにつながりますから。

長塚 高柳さんは、KAATにお越しいただいたことはありますか？



高柳 技術部長だった頃、KAATで番組の公開収録をしたことがあります。同じ建物を共有しているのに、KAATには中継用の端子盤がなくて驚きました。

長塚 端子盤とは？

高柳 中継用のケーブルコネクタをまとめた設備です。NHKホールはもちろん、東京ドームでも中継車を停める場所のすぐ近くに設置されていて、比較的簡単に放送ができるようになっています。でも、KAATとNHKの間にはそれがなかったので、1Fに停めた中継車から5Fのホールまで、何本も長いケーブルを張る必要があったのです。

長塚 それは僕も知りませんでした。では、完全に共有しているのはアトリウムくらいですね。

高柳 アトリウムを使って、この場所を盛り上げるようなことができないだろうかと考えているんですよ。NHKとしては放送を通して地域の方々とつながることが目標なのですが、せっかくいい場所に放送局があるので活用しないともったいないですよ。

長塚 そうなんです。近くに横浜中華街や山下公園などの観光スポットがありながら、ここはまだふらっと立ち寄れる場所としては知られていない。僕らもここでアートの展示やパフォーマンス、マルシェを開催しているし、NHK横浜放送局もドラマのセット展示などのイベントを行っていますから、「ここに面白いものがあるぞ」ともっと発信していきたいですね。

高柳 NHK横浜放送局のハートプラザには8Kシアターやフォトスポットがあり、特別開館日は「どーもくん」が登場することもあるんです。KAATと協力して盛り上げていきたいですね。

長塚 ぜひ。これからもおとなり同士としてよろしくをお願いします。



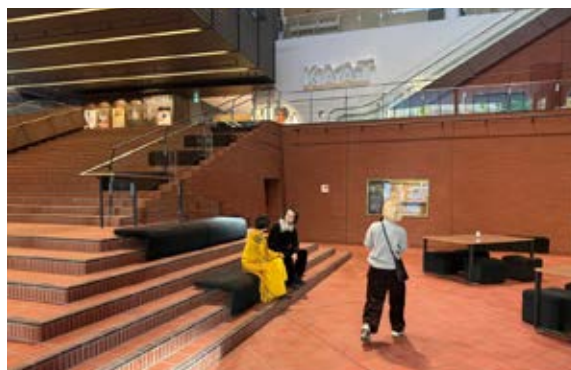
NHK横浜放送局 <https://www.nhk.or.jp/yokohama/>

KAAT PAPERのInstagramが開設！

KAAT神奈川芸術劇場の広報誌『KAAT PAPER』のInstagramを開設します。取材時のオフショットや記事にまつわる情報やお知らせを中心に、随時更新していきます。ぜひフォローをお願いいたします！



<https://www.instagram.com/kaatpaper/>



本号対談のオフショットより

KAATオリジナルグッズを作成しています！

KAATオリジナルのクッキー・キーホルダーを作成しています！KAATクッキーは2025年11月に開催したKAATマルシェでも販売し、ご好評をいただきました。本号のアンケートに回答くださった方に抽選で、KAATキーホルダーをプレゼントいたします。詳しくは本誌裏面の読者アンケートの欄をご覧ください。今後の販売などについては、Instagramやホームページなどでお知らせいたします。



本号「神奈川へ、会いに」のオフショットより

ただいま、
KAAT準備中



KAATクッキー



KAATキーホルダー

主催公演

《メインシーズン「虹～RAINBOW～」プログラム》

KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第三弾
『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』
『帰ってきた冒険者たち ～闇に落ちたカナガワを救え!～』
2026年2月11日(水・祝)ー23日(月・祝) (中スタジオ)



『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』

上演台本・演出:長塚圭史(原作:吳承恩「西遊記」)
共同演出:大澤遊 音楽・演奏:角銅真実

『帰ってきた冒険者たち ～闇に落ちたカナガワを救え!～』

作:長塚圭史 演出:大澤遊
音楽・演奏:角銅真実

出演:柄本時生、菅原永二、佐々木春香、長塚圭史、成河
チケット好評発売中

KAATを飛びだし、神奈川県内を巡るプロジェクトの第三弾!「西遊記」のキャラクター
たちが神奈川の伝説や昔話の世界に迷い込む冒険譚、『冒険者たち ～JOURNEY
TO THE WEST～』待望の再演と、『冒険者たち』シリーズ新作の同時上演!

KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース
『未練の幽霊と怪物ー「珊瑚」「円山町」ー』
2026年2月13日(金)ー3月1日(日) (大スタジオ)



作・演出:岡田利規
音楽監督:内橋和久
出演:アオイヤマダ、小栗基裕(s**t kingz)、
石倉来輝、七瀬恋彩、清島千楓、
片桐はいり
謡手:里アンナ 演奏:内橋和久
チケット好評発売中

能のフォーマットを応用し、ついえた「夢」を幻視する、レクイエムとしての音楽劇

〈チケット取扱い・お問い合わせ〉チケットかながわ 0570-015-415 (10時～18時/年末年始を除く)

今号の表紙について

日頃から芸術や文化にまつわる仕事に関わりたと思っていたので、お声がけいただきとてもうれしく感じています。今回の特集内容を伺い、「多様性」を描くというのは少し難しいテーマだなと思いましたが、あまり難解なことは考えずにさまざまな人を描いてみました。踊っているような、スキップしているような、はたまた寝転んでいるような……小さな子どもからおじいちゃんまで、思い思いに体を動かす人々を通して、老若男女さまざまな人達が劇場に集う様子や、そこから生まれるポジティブなエネルギーを表現できればと思いました。また、人と人が直接する劇場という場所がもつ身体性に通じるように、手の痕跡が残るアナログな仕上げで彩色を施しました。

石田和幸 Kazuyuki Ishida

グラフィックデザイナー、アートディレクター。1993年大阪生まれ。東京造形大学卒業。イヤマデザインを経て、サン・アドに所属。広告を中心とした仕事と並行してドローイング作品の展示活動なども行っています。
instagram: @kazuyuki_ishida_gd

KAATな人の行きつけ

《第12回》

GESAN(ゲサン野毛)

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。
そこで出演者や展示アーティスト、スタッフが足しげく通う、
この街の“行きつけ”をご紹介します。

写真=石渡朋



もちもちアイスクリーム(ラムレーズンソース)650円、
コーヒー(ホット)600円、ナチュラルワイン(グラス)1,100円～ (すべて税込)

横浜のナイトライフを語るうえで欠かせないスポットといえば、野毛。老舗の居酒屋やレストラン、こだわりのある個性的な飲食店が軒を連ね、毎夜多くの人でにぎわっています。その野毛エリアにある吉田町に2025年オープンしたのが「GESAN」。店主の竹山健太さんは、野毛ではしご酒をするたび、「締め甘いものが欲しい」と感じていたことから、学生時代の同級生とともに「オールディアベロ&バーラー」のお店を立ち上げました。ディナー前のアベロや、ナチュラルワインのバーとして、人気メニューの「タコアボ」(タコとアボカドのマリネ)とお酒を楽しめ、さらに夜にスイーツとコーヒーというように、幅広いシーンで利用できます。夜遅くまで営業しているので、KAATで夜公演を観劇したあとに、ワインとスイーツを楽しんでみてはいかがでしょうか。



GESAN(ゲサン野毛)
〒231-0041
神奈川県横浜市中区吉田町5-1 第一吉田ビル206
〈営業時間〉23:00閉店
〈定休日〉月曜・不定休
※不定期な変更があるため、営業時間など詳細はInstagramの
ストーリーズをご確認ください。
〈instagram〉@gesan_yokohama

KAAT 公演スケジュール 2026 WINTER

1月10日(土)ー3月31日(火)	KAAT神奈川芸術劇場 開館15周年記念イベント 15周年記念パナー展示	アトリウム
1月25日(日)ー1月26日(月)	KAAT舞台技術講座2026 制作者のための舞台技術講座	大スタジオ
1月30日(金)ー1月31日(土)	チャレンジ・オブ・ザ・シルバー「シニアのための体験型ダンスイベント」	大スタジオ
2月11日(水・祝)ー2月23日(月・祝)	国立劇場 令和8年2月文楽公演	ホール
2月11日(水・祝)ー2月23日(月・祝)	KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第三弾 『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』 『帰ってきた冒険者たち ～闇に落ちたカナガワを救え!～』	中スタジオ
2月13日(金)ー3月1日(日)	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『未練の幽霊と怪物ー「珊瑚」「円山町」ー』	大スタジオ
2月28日(土)ー3月1日(日)	笑福亭鶴瓶トークライブ『TSURUBE BANASHI 2026』	ホール
3月5日(木)	グリーンシアター・ワークショップ	中スタジオ
3月15日(日)	かながわパフォーミング・アーツ・アワード2026	大スタジオ
3月21日(土)	つたえつなぐ	中スタジオ
3月29日(日)	やさしい鑑賞会『わたしたちをつなぐたび』	大スタジオ
毎月開催(日程は決定次第発表します)	KAATフレンドシッププログラム「みんなのKAAT バックステージツアー」	ホール

※情報は2026年1月9日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
<https://www.kaat.jp>

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!
日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。

指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団



KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方の中から抽選で10名様に、KAATオリジナルキーホルダーをプレゼントします。※プレゼントの応募期限:2026年3月31日(火) ※厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

